

「メアリーにあげるね」

さし出されたお菓子の箱と、マミヤくんのきれいな顔を、メアリーは交互に見つめた。

「はい、あげる」

なかなか受け取ろうとしないメアリーに、マミヤくんは根気よく、その小さな箱をさし出しつづけた。

「おいしいよ、チョコのお菓子。オレも好きなお菓子だよ」  
マミヤくんのやさしい声。

やわらかくて少しだけかすれている、夏でも冬でもないころに吹く風のような声。

マミヤくんは、品のいい髪型ときちんとした服装で、菱田西小学校にかよっている。手足のすらりとした、とても見た目のいい男の子だ。

「そろそろ帰らなくちゃいけないから、これ、ここに置いていくね」

メアリーの目の前にお菓子の箱をそっと置いて、マミヤくんは立ちあがった。メアリーはただ、マミヤくんを目で追うことしかできない。

「じゃあ、またあした。塾の帰りに寄るね」

ああ、うれしい。マミヤくんはまたきてくれる。これが最後じゃないんだ。

うれしさのあまり、メアリーは涙を流した。  
メアリーの涙は、とってむくさい。

それなのにマミヤくんは、少しもいやな顔をしないで、「じゃあね」と手をふってくれる。

ああ、マミヤくん。

マミヤくん……。

小さい涙が、とめどなく流れる。

マミヤくんのうしろ姿が遠ざかっていくのを、メアリーはいつまでも見送りつづけた。

メアリーに家族はいない。

気がついたときには、下水道のよどんだ泥水につかっていた。

泥水と自分の皮膚の区別もつかないような状態のまま、ずるずると地上に這い出したのは、もうずいぶんむかしのことだ。

はじめて人から悲鳴をあげられたときは、いまでもよく覚えている。

大きな花柄のワンピースを着た、おかつぱ頭の小さな女の子だった。

当時はまだ舗装されていなかった、ほこりっぽい土の道のまんなかではったり出くわしたその女の子は、メアリーを見た瞬間、体の内側から爆発したような悲鳴をあげて、その場にばたんとたおれてしまった。